

## 高知県教育委員会

【総人口】664,445人（R6.1月）

【自治体 関連URL】<https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/311601/>

【主担当部局】高知県教育委員会事務局幼保支援課  
（幼児教育担当）

【主な関係部局】高知市教育委員会学校教育課  
（就学前教育班）  
高知市こども未来部保育幼稚園課  
（保育所・認定こども園担当）

	幼稚園			保育所		幼保連携型 地域裁量型		小学校		
	国立	公立	私立	公立	私立	公立	私立	国立	公立	私立
施設数	1	9	23	117	107	9	11	1	186	2
園児・ 児童数	85	353	2,051	7,203	8,891	647	1,230	633	29,936	424

事業実施地域・ 協力園校	【実施地域】 高知市 春野東小学校区
	【協力園校】 幼：公立保育園2園、私立保育園1園、幼保連携型認定こども園1園、幼稚園型認定こども園1園 小：公立小学校1校

架け橋期の カリキュラム開発 会議	【会議委員人数】 15名	【開催数】 全4回
	【委員属性】 公立保育園長2名、私立保育園長1名、私立認定こども園長2名、公立小学校長1名、市教育委員会1名 市保育幼稚園課1名、県教育センター1名、大学教授3名、県幼保支援アドバイザー1名、県保幼小連携アドバイザー1名 小学校区保護者代表1名	

架け橋期の コーディネーター等	【配置人数】 1名
	【経歴】 ・現 大学教授（幼児保育学科）、副学長 ・元 県教育委員会 幼保支援課 専門企画員

架け橋期の カリキュラム	【開発主体】 春野東小学校区（2公立保育園、1私立保育園、1幼保連携型認定こども園、1幼稚園型認定こども園、1公立小学校）
-----------------	--

## カリキュラム開発会議

### ① 架け橋期のカリキュラムに関する議論

#### 【カリキュラム策定の基本方針】

1. 市町村における意思決定
2. 園・校との合意の形成
3. 市町村による「話し合い」の体制整備
4. 「子供をまんやかにして互いの教育内容を話し合う」取組開始
  - (1) 校区内の「めざす子供像」を決める
  - (2) 育みたい力を共有する
  - (3) **互いの教育内容を話し合う（重要）**
  - (4) 話し合いを踏まえて、「架け橋期のカリキュラム」を一緒に作る
5. 架け橋期のカリキュラムを実践・評価・改善していく取組の定着

所管や部局の枠を  
越えて取り組む

開発会議での議論を通してのカリキュラム  
策定時の重要な要素を抽出し、  
カリキュラム作成時のガイドとして活用中

#### 開発会議における議論の流れ

##### （1年目）

「モデル地域のめざす子供像と育みたい力について」



「カリキュラムの内容に関する共通の視点について」



「遊びや学びの中で大切にしたい経験」や「環境構成」「援助」などの検討を行い架け橋期のカリキュラムを策定。

##### （2年目）

「開発したカリキュラムの有効性に関する検証方法について」

- ・モデル地域の実践から見てきた子供の具体的な姿から子供の育ちを検証していく。(5歳児と1年生の2年間で事例をもとに検証)
- ・モデル地域の取組から見てくる成果とそれを支える仕組みについて検証する。

### ② 会議設置による成果と課題

#### 【成果】

- ・めざす子供像についての協議や子供の姿の共有を通して、モデル地域で育みたい資質・能力が明確になった。
- ・様々な立場の委員の意見を反映しながら、カリキュラム開発につなげることができた。また、カリキュラム開発会議の委員としてモデル地域の施設長が入ることによって、会議における議論をふまえ、課題意識をもって園・校運営に取り組むことができた。
- ・カリキュラムの有効性を検証する方策として、日々の実践の中から、子供の育ちの事例をとることを通して、5歳児と1年生の2年間における資質・能力の育ちの繋がりを見ていくことの共通理解を図ることができた。併せて、成果が見えてきているモデル地域の実践を支えている要素についても検証を行っていく方向性を確認することができた。
- ・実践から見てきた子供の育ちをもとに、カリキュラムの修正案を検討し、現場の先生方がより分かりやすい、実践に繋げることのできるカリキュラムへとブラッシュアップすることができた。

#### 【課題】

- ・今後は、架け橋プログラム事業終了後の継続したカリキュラム開発会議の開催が課題となってくると考えている。既存のコミュニティスクールの運営協議会などを母体とする案も出ているが、架け橋期のコーディネーターをどのような形で選定するか、開催頻度やカリキュラムの見直し方法等はどのようにしていくかなどについて現在の時点では明確に共有できていない。

## 架け橋期のカリキュラム

### ① 開発プロセス

- ・保育者と小学校教員の連絡会における話し合いをもとに、県がカリキュラム案を作成し、提案・修正。具体的には下記の手順で作成・ブラッシュアップ。
  - 1) 連絡会で共通のテーマにおいて、子供の姿や育ち、環境構成、援助について出し合い共有。  
「秋の自然物を使った遊び」「体を使った遊び（運動会・体育）」「お正月の遊び」などをテーマにして、「子供の姿（事実）」「その姿から見られる育ちつつある力、楽しんでいること（内面）」「そこに繋がった環境構成や援助」について5歳児と1年生で共有。それを10の姿や資質・能力に照らし合わせたり、繋がりが違いを考えたりして、互いの教育内容を知り合う機会を、つないでいった。
  - 2) 共有したものとこれまでのカリキュラムを合わせて、県が素案を作成。
  - 3) 項目は、文科省からの提案を使い作成、開発委員会にてご意見を元に修正。  
5歳児は探究することを楽しむ、1年生は探究するをテーマにし、**遊びや学びの中で大切にしたい経験**を共通の視点の柱として設定。  
子供の育ちを資質・能力でつないでいくことを確認。実際に保育や授業を見合っの研修の場を設け、話し合ったことを実践を通して共有。
  - 4) そのほかについても、開発委員会にて意見をもらい作成。
  - 5) 作成したカリキュラムをもとに実践し、定期的に振り返りを実施。実践から見えてきたことをカリキュラムに反映。（2年目）

### ② 架け橋期のカリキュラムの概要

#### ○工夫した点やポイント

- ・園は「友達や先生と一緒に探究することを楽しむ」、小学校は「探究する」をカリキュラムの中心とし、「探究」をキーワードにカリキュラムを構成。
- ・園、校双方のカリキュラムに探究のプロセスを位置付け、遊びや学習の過程の共通点が明確になるように表現。
- ・小学校のカリキュラムでは、探究のプロセスに「指導者の問いかけ」を例示。
- ・園、校のカリキュラムについて共通の視点を設定。  
（遊びや学びの中で大切にしたい経験、めざす子供の姿、予想される活動、指導上の配慮事項、家庭や地域との連携等、行事等）
- ・めざす子供像はモデル地域を含む中学校区のコミュニティスクールのめざす子供像と関連させて設定。
- ・「遊びや学びの中で大切にしたい経験」については主となる経験とそれに付随する経験を例示。
- ・「遊びや学びの中で大切にしたい経験」についての事例集をカリキュラムに付随する資料として園、校ともに作成。
- ・作成したカリキュラムをもとに、自園・校の年間計画にめざす子供像や大切にしたい経験を反映し実践へと繋げる。
- ・カリキュラムをもとにした実践から見えてきた子供の育ちをカリキュラム修正案に生かすようにし、定期的にかリキュラムを評価する。

#### ○既存のカリキュラムとの相違点

- ・作成の過程でモデル地域のすべての園、校の管理職や担任が関与した校区内共通のカリキュラムであること。これまでは、それぞれの施設ごとに作成。  
（めざす子供像や大切にしたい経験が共通のものとなり、校区内のどの幼児教育施設に通っていても共通の考え方に基ついた教育を受けることができる）
- ・これまで記載のなかった「資質・能力」について「大切にしたい経験」という形で記載。

## 架け橋期のカリキュラム

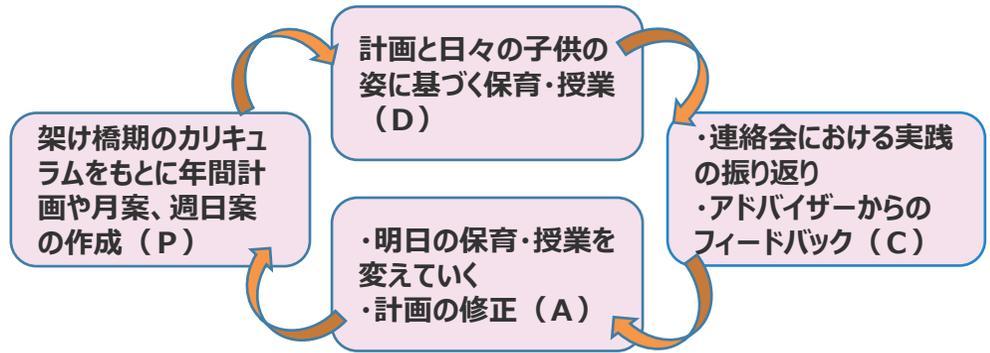
### ③架け橋期のカリキュラムの実践

架け橋期のカリキュラムをもとに、それぞれの園・校で年間指導計画等を作成し、実践。

#### 課題

- ・当初はカリキュラムだけでは環境構成や援助の具体的なイメージを十分にもつことができなかった。
- ・カリキュラムに記載されている大切にしたい経験が評価の基準になってしまい、「できる」「できない」で見えてしまうことがあった。
- ・園、校のカリキュラムの繋がりが見えづらく、互いのカリキュラムを十分に意識した実践に繋がっていなかった。

- 幼保支援アドバイザーや幼保小連携アドバイザーが支援に入り、架け橋期のカリキュラムに基づく評価をフィードバック。
- すべての施設において公開保育・授業、協議を実施。
- 連絡会で、めざす子供像をもとに実践を振り返り、カリキュラムと実践から見えてくる成果や課題を繋げる時間を定期的に設定。
- 連絡会でカリキュラムを使ってみての率直な感想を交流。



#### 上記のプロセスの中での意見を架け橋期のカリキュラムにも反映

- 園・校が互いの実践（協議まで含む）を見合うことでカリキュラム理解の深化につながった。
- 定期的にかリキュラムに基づいた実践の振り返りを行うことで、カリキュラムに基づいた実践への意識が高まった。
- 互いの教育内容を踏まえた実践が展開されるようになった。
- 園・校のカリキュラムが実践者にとってより活用しやすいものへとブラッシュアップすることができた。

#### 保幼小の先生の変容

#### 先生の変化が子供の変化へ

#### 子供の変容

- ①先生からは、教育観や指導観が大きく変化したとの声がたくさんあがっている。具体的には、遊びや学習の中で「子供にこれまでの経験を尋ねる」「子供の思いを聞く」「子供に任せて待つ」など子供主体の保育や授業を意識した援助がたくさん見られるようになった。
- ②この2年間で1小5園の先生たちの繋がりが深まり、交流会の立案に際して、頻りに連絡を取り合うなど、日常的に連携し合う姿があった。
- ③園内研修や校内研修を通して、職員全体に架け橋の取組の考え方が浸透してきており、各施設で組織的な取組が展開され始めている。

- ①遊びや学習の中で、「自分たちで考える」「意見を出し合う」「吟味する」「決める」「実行する」「振り返る」「再度実行する」といった探究のプロセスを辿る姿が見られるようになってきている。
- ①交流会では大勢の前で堂々と感想を伝える姿があり、楽しむだけでなく、自信をもって活動する姿がたくさん見られるようになってきている。
- ②1年生から届いた交流会の招待状に園児が返事を書いたり、交流会を通して知り合った他園の友達に向けて手紙を書きたいと考える子供たちの姿があった。3回の交流会を通して、交流の輪が広がり、入学に向けて幼児、小学生共に期待が高まっている。

## 次年度への展望

### ④ 成果と課題、及び展望 ○ 2年間の取組の成果と課題

#### 成 果

- ・設置者、施設類型を越えてモデル地域において関係性を深めることができた。特に、園の横の繋がりが強化され、園同士の交流機会も増加している。
- ・自治体内において、担当の部局を越えてモデル地域の取組を支える仕組みが構築できた。
- ・共通のカリキュラムに基づく実践がそれぞれの施設で展開されている。さらに各施設において5歳児と1年生以外の年齢へも架け橋の取組が広がりがつつある。
- ・連絡会での教材研究や公開保育・授業を通して、互いの教育の特性理解が深まった。
- ・互いの教育内容への理解が深まることで、先生の意識が変わり、小学校教育を見通した幼児期の教育、幼児期の経験を生かした小学校教育が展開されはじめている。
- ・実践を通して見られた子供の具体的な姿や実践者の声をもとにカリキュラムの修正を行い、より活用しやすいものへとブラッシュアップできた。
- ・モデル地域の実践をもとに、架け橋プログラムシンポジウムを開催し、県内全域に架け橋プログラムの魅力を発信することができた。
- ・モデル地域の成果をまとめたDVDを作成し、県内の幼児教育施設、小学校、市町村主管課に配布し、取組の普及に繋げることができた。
- ・クリアファイルを作成し、架け橋期の取組や幼児期からの学びのつながりについて周知することができた。

#### 課 題

- ・深まりつつある互いの教育の特性理解のさらなる深化と、理解に基づく幼児教育と小学校教育双方の質向上への取組が重要である。
- ・各施設において、組織的な取組となりつつある架け橋プログラムの取組をサポートする自治体の体制整備が必要。具体的には各施設の現状に合わせた研修計画の作成・実施や継続したアドバイザーによる訪問支援等が考えられる。
- ・家庭や地域に対する発信が十分とは言えず、取組の成果が十分に伝わっていない。
- ・R7年度の以降の架け橋プログラムの推進体制の構築。特に、これまで架け橋期のカリキュラム作成において重要な役割を占めていたカリキュラム開発会議を今後どのように実施していくか。また、双方の教育に造詣の深い架け橋コーディネーターをどのように選定していくかについて課題がある。
- ・作成したDVDを含む、モデル地域の実践をもとにした県内全域への取組の普及。特に市町村自治体への働きかけと継続した支援。
- ・客観的な数値を用いての架け橋プログラムに取り組んだ成果について、十分に示すことができていないため、現在取り組んでいる学力調査やQUアンケートに加え、今後、保育者・教員、保護者、地域へのアンケートを実施するなど取組の効果を検証していく。

#### 今後の展望

- 昨年度の実践を踏まえた、さらなる双方の教育の特性理解と質の向上。（連絡会等における継続的な研修と振り返り、公開保育・授業等）
- モデル地域において架け橋プログラムの取組が根付くための持続可能な体制整備の検討。
- 実践事例をもとに2年間の育ちの検証（資質・能力を視点に）と実践を支える要素の検証（アドバイザーや自治体、開発会議による支援等）
- 県内全域へ、さらなる架け橋プログラムの魅力と必要性の発信（教育センターと連携した研修実施、シンポジウム開催、取組をまとめた冊子の作成）
- モデル地域以外の市町村への継続的な支援の充実